

## 海外学園生との交流会

### —アイシン精機株式会社との連携事業—

愛知県立豊田工業高等学校 発表者 電子機械科3年 出口 和輝  
自動車科3年 平岩 侑樹  
指導者 新美 貴史

#### 1. はじめに

私たちの学ぶ愛知県立豊田工業高等学校は、自動車産業の盛んな愛知県豊田市の南部にあり、機械科、電子機械科、自動車科、電子工学科の4学科を設置し、例年9割以上の生徒が就職している。文化祭では各社の自動車が並び、多くの先輩がトヨタ自動車を母体としたいわゆる「トヨタ系」と呼ばれる企業で活躍している。本校は平成26年度より3年間スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール（SPH）に指定され、私たちは本事業により、地域の企業や大学で活躍されている方々から専門的な技術や技能を直接指導していただく機会を与えていただいている。本稿では、私たちが第26回全国産業教育フェア石川大会で発表した本校のSPH事業の柱である「グローバルに活躍できるエンジニアに必要な技術・技能の修得」として、海外に進出している大手自動車部品メーカー（アイシン精機株式会社）のネットワークを生かした多国籍の学園生と交流会について紹介する。

#### 2. 具体的・特徴的な実践内容

##### (1) 交流会

交流会は、アイシン精機株式会社の企業内学園であるアイシン高等学園で行い、はじめに横井学園長からアイシン高等学園について紹介をしていただいた。横井学園長の講義を受け、ア

イシングループで製造される自動車部品は、世界中の自動車メーカーの様々な車種に搭載されていることをはじめ、自動車産業のグローバルビジネスの拡大において、グローバル人材の育成は不可欠であること、アイシン精機では海外拠点の幹部社員候補、現地法人の若手キーパーソンなど、国内外のグループ会社社員のための研修制度を導入し、グローバルな舞台で活躍する従業員の支援を積極的に行っていること、日本人だけでなく、各国の技術者を学園生として日本に迎え入れ、世界各国の技術者としてリーダーとなる人材を企業内学園で育成していることなどを知ることができた。

その後、学園生1名に対し、豊田工業生4名もしくは5名の小グループで交流が始まった。まず、お互いに自己紹介を英語で行い、自己紹介は英語のみで話すというルールで進めたが、英会話というよりは英単語を並べただけの紹介になってしまったりして、なかなかうまく伝えられないこともあった。しかし、学園生は私た



図1 アイシン高等学園の概要説明

ちが間違っただ単語を使って話したり、話したことで分からないことがあると、すぐに質問をしてくれたりするなど、私たちの伝えようとする内容を一生懸命に聞いてくれた。学園生が英語を使って自己紹介をするときは、ところどころで「わかりますか?」と確認し、丁寧に伝えようとする気持ちを強く感じた。また、学園生は日本のアニメのことをよく知っており、共通の話題としてとても盛り上がった。日本のアニメは、海外でもとても愛されていることを知り、日本人として嬉しく思った。

続いて、アイシン精機企画として「英語でしりとり」というゲームを行った。この「英語でしりとり」は、日本のしりどりの英単語版で、英単語の語尾を次の頭文字にしてしりとりをしていき、語尾に「ん」にあたる「n」がついてはいけないというルールで行った。各グループで英単語の数を競いながら、発言した単語はA4用紙に順番に書いていき、書いた単語は学園生がスペルチェックをしてくれた。ここでも学園生はとても一生懸命にゲームに参加してくれ、なにより自分から進んで行動するという姿勢や、自分を信じる気持ちを強く感じた。このゲームから、何事も指示を待つのではなく、自ら行動しようとする気持ちを持つことが大切であることを実感した。

次に豊田工業高校企画として、「グルーマッピング」を行った。「グルーマッピング」とは、話し合った写真や付箋を地図上に貼り出し、話し合った内容について説明するものである。事



図2 英語での自己紹介の様子



図3 英語でしりどりの様子

前調査で、学園生が日本の祭りにとっても興味があると聞いていたので、愛知県で開催されている祭りを取り上げ、祭りの内容を学園生に紹介して、最後にグループで話し合った祭りの由来や内容を英語で発表した。この企画を通してお互いの国の文化を知ることができたとともに、海外学園生と協力して1つのものを作り上げていく企画力や協調性を身に付けることができた。

## (2) 実習場見学

最後にグループごとに施設を見学し、海外学園生が英語と日本語が混じり合った単語とジェスチャーを使いながら説明してくれた。施設内は「5S（整理、整頓、清掃、清潔、躰）」が行き届いており、清潔感に溢れていた。私たちが実習で使っている機械や装置から、工場で使用されるようなアームロボットの制御装置など、普段なかなか触ることのできない機器までたくさんの実習機器があり、かなり高度な学習をしていることが分かった。また、学園生の話から海外においても機械と電気の両方の知識が必要であることや、学園生はここで学んだことを、自分の国に持ち帰り、現地で伝えていかなけれ



図4 グルーマッピングの様子

ばいけないという強い意志を持っていることも感じることができた。交流会は短い時間ではあったが、非常に有意義な時間となり、最初は緊張していた参加生徒も、終わり頃にはごく普通に海外学園生と会話をするまでになっていた。

### (3) SPH 事業等発表会

11月に開催された「第26回全国産業教育フェア石川大会 SPH 事業等発表会」において今回の取組内容の発表を行った。

#### ア. ポスター展示

本校のSPH事業の概要と、海外学園生との交流会の内容の2枚のパネルを展示し、私たちが3年間に渡って本校のSPH事業で体験した内容を紹介した。会場には年齢、性別を問わず多くの方が来場し、本校に関する様々な質問にも対応することができた。

#### イ. 発表会

発表会では、海外学園生との交流会についてパワーポイントでの資料を掲示しながら発表を行った。初めての全国大会の場での発表であったが、海外学園生との交流を通して身に付けたグローバルに活躍できるエンジニアに必要な知識・技術について、多くの視聴者を前に堂々と発表することができた。また、本校と同様にSPH事業に指定された工業、農業、福祉、家庭、水産等の発表を視聴して、他の専門高校生の考えや社会における工業と他の産業との違いや関わりも知る事ができた。



図5 ポスター展示の様子



図6 発表会の様子

#### ウ. 白熱トーク

「地域を活性化する専門的職業人とは」をテーマとして、パネルディスカッションの形式で、全国の専門高校生、特別支援学校の生徒と意見を交わした。高校生だけでなく、有識者や企業の方を交えたディスカッションは、社会人として必要な考え方や物事を様々な視点で捉えることの重要性を感じさせられるものであった。



図7 白熱トークの様子

### 3. 成果と今後の課題

図8及び図9(次ページ)は、参加生徒全員に対し、交流会の事前と事後に「将来、海外で仕事をしてみたいですか?」とアンケートをとった結果であるが、交流会によって、「将来、海外で仕事をしてみたい」という回答が大幅に増加した。

この結果から、今回の海外学園生との交流会を通じて、私たちは、グローバルに活躍できる



図8 生徒アンケート（事前調査）



図9 生徒アンケート（事後調査）

エンジニアになるために、次の3つのことに気づくことができた。

1つ目に、外国人と会話することへの抵抗感が減ったことである。私たちは、外国人と交流することの壁は言語ではなく、自分の心が作っている壁であることに気付くことができた。

2つ目に、技術者としての英語を使いこなす必要性を感じたことである。将来、海外で活躍するためには、基礎的な英語力の向上が必要であるとともに、さらには工業分野での専門用語も学ばなければいけないことを痛感した。

3つ目に、コミュニケーションとは「相手を思いやる気持ちである」ということに気が付いたことである。今回の学園生の姿勢から、人種や国籍、言語が一番の問題ではなく、相手を本気で思いやれば必ず伝わるということを学ぶことができた。

私たち工業高校生は、学校で学んだ英語や専門英語を試せる機会があまりなかったことも妨げになっていたかもしれないが、今回の経験から、今後、グローバルに活躍できるエンジニアになるためには、次の4つのことに取り組むべきであると考えた。

- ・工業の知識・技術の更なる向上

- ・工業技術に関する英語を身に付ける
- ・積極的に英語を使って話すようにする
- ・海外インターンシップ等への参加

#### 4. おわりに

私たちはこの交流会を通して、言語が異なる相手とコミュニケーションを取ることの難しさと、大切さを感じることができた。また、外国人に対するイメージが変わり、自分の勇気さえあれば、英語でのコミュニケーションも図ることができることが分かった。更に、企業内学園で交流会を行ったことで、実際に企業ではどれくらいのグローバル化が進んでおり、海外学園生がどのような国から来日し、学園で何を学んでいるのかも知ることができた。施設見学では、安全第一や整理整頓などの基本的なことの大切さも知ることができた。SPH 事業の目的の一つであるグローバルな視点を持ち、海外で活躍できる技術者（エンジニア）となるために、何をしていけば良いかが分かったことを嬉しく思う。具体性を持って、海外でぜひ活躍してみたいと思えたことが最も大きく感じたことである。

工業教育資料 通巻第 372 号  
(3月号)

2017年3月5日 印刷  
2017年3月10日 発行  
印刷所 株式会社インフォレスト

© 編集発行 実教出版株式会社

代表者 戸塚雄式  
〒102 東京都千代田区五番町5番地  
- 8377 電話 03-3238-7777  
<http://www.jikkyo.co.jp/>